

## TOPICS

## 高松宮妃癌研究基金第 28 回国際シンポジウム 「Cancer genomics」に出席して

馬場 正三\*

高松宮妃癌国際シンポジウムの討論者として出席するために皇居前のパレスホテルに滞在していたら、「W'Waves」の編集長 生越喬二先生より主題は自由で良いから第 4 巻に何か書くようにとの FAX がとどいた。

ちょうど、CNN テレビで、英国の Queen Elizabeth の The Royal 50 th Anniversary の式典でエリザベス女王の演説を聞いていた。

エリザベス女王は、ブレア労働党党首の主催する party だったのか彼の方をむき、“Thank you Mr. Minister for celebrating special day in our life”といわれ着席され、その後フィリップ殿下が乾杯の音頭をとろうとするとところでノックがありボーイが FAX を持参しテレビは中断された。

昨夜は invited speakers とともに高松宮妃殿下の御自宅に招待される光栄にあずかった。今週は何か皇室づいていと感じ高松宮妃国際シンポジウム出席の感激を書くことにした。

高松宮妃シンポジウムははじめて出席させていただいたが、長いシンポジウムの歴史のなかで世界の一流の学者が皆喜んで御招待を受諾し、1 人も出席を断られたことがないとのことであった。

Scientific advisory committee の委員の方々の適切な主題の決定と invited speaker の正しい選考によることはもちろんのこと、このシンポジウムがいかに prestigious なものであるか、出席してはじめて実感した。

今年の高松宮妃癌研究基金の第 28 回国際シンポジウムの主題はがんとゲノム (cancer genomics) であった。

がんは本質的には複数の遺伝子の異常の蓄積による疾患であると理解されるに至っている。

過去 15 年間のがん研究の中心課題はこれらのがん関連遺伝子の同定と機能の解析であった。これらの基礎的研究の蓄積により、がんは新しい診断、治療、予防法の開発と標的分子を目標とした新しい戦略が考えられる時代に突入した。

本研究会を設立された磯野可一教授の意図もこの辺にあると考え、シンポジウムの内容を本誌に紹介するのはタイムリーであると考えた。

シンポジウムは 3 日にわたりパレスホテルで行われた。高松宮妃殿下の opening address ではじまり、Dr. Carlo M Croce が返礼され、杉村 隆 国立がんセンター名誉総長が introductory remark をされ、Dr. Raymond L White の key note lecture ではじまった。

第 1 日目は  $\beta$  カテニンと大腸癌発癌, genomic instability, signaling, apoptosis が、第 2 日は animal genomics, mutator gene, oncogene, suppressor gene, target genes が討論された。Dr. Peter K Vogt と中村祐輔教授の target gene の話は、特にわれわれ臨床家にとっては非常に興味深い内容であった。

そのあとで中原記念講演として、米国のワシントン大学教授の Dr. Mary-Claire King が BRCA-1 遺伝子を用いた卵巣癌の腹膜転移に対する遺

\* 浜松医科大学第二外科学教室

伝子治療の臨床第一相試験の最近の報告を発表した。

第3日はミスマッチ修復遺伝子の発見者の Dr. Richard D Kolodner 司会のもとに、レトロウイルスのがん遺伝子研究の先駆者の一人で「プロトオンコジーン」の概念の確立にも寄与した Dr. Peter K Vogt のがん遺伝子の講演にはじまり、oncogene chromosome の演題があった。関谷剛男先生は CpG island に関し、genome scanning では林崎良英先生が演題を「A novel & efficient method for synthesis of full length cDNA library」に変更され最新の技術をそれぞれ紹介された。

最後の Dr. Alexander Kamb の癌治療薬剤開

発の具体的戦略の話、Dr. Patrie O Brown の DNA microarray, Dr. David J Lockhart の DNA chip の話など、technology 進歩の速さに驚くばかりであった。ただ臨床応用する場合の cost-benefit の面でどこまで可能になるのか、なお解決されなければならない barrier もいくつかあるように感じられた。

第3日終了後、高松宮妃邸に invited speaker とともに御招待を受けた先日の癌学会のシンポと一緒にあった Dr. Perucho, アカブルコと一緒に講演した Dr. Gray などとも会うことができ旧交を温めることができた。頭もお腹も一杯に満たされ幸福感にひたりホテルへのバスに乗った。